

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

ラブラドル・エスキモーの資源利用と毛皮交易：
ヌネンガック遺跡Nunaingok
site(JcDe-1)の動物遺存体の分析を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 手塚, 薫 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001984

ラブラドル・エスキモーの資源利用と毛皮交易

ヌネンガック遺跡 Nunaingok site (JcDe-1) の動物遺存体の分析を中心に

手塚 薫

北海道開拓記念館

- | | |
|------------------------|--------------------------------|
| 1 はじめに | 4.1 パレオ・エスキモー／ネオ・エスキモーの生業・集落形態 |
| 2 東部極北圏とラブラドルの歴史・自然的環境 | 4.2 狩猟時期と狩猟法の復元 |
| 2.1 ラブラドルの歴史的背景 | 4.3 資源利用にみられる特徴の時期的変化 |
| 2.2 ラブラドルの自然的特徴 | 5 ラブラドルにおける毛皮交易の発展 |
| 3 ヌネンガック遺跡 | 5.1 毛皮交易への参入 |
| 3.1 遺跡の立地 | 5.2 取引される毛皮品目の変化とその背景 |
| 3.2 発掘調査した住居址 | 6 おわりに |
| 3.3 文化編年 | |
| 3.4 動物遺存体の分析 | |
| 4 資源と土地の利用 | |

1 はじめに

北米東部極北圏では、20世紀になるまで毛皮交易専用の交易所は開設されず、商業的毛皮交易がイヌイト社会に浸透していなかったといわれる¹⁾。カナダ・ラブラドル半島 (Labrador Peninsula) 地域でも、モラヴィアン・ミッション (Moravian Mission) の布教活動が中・南部地域に比べ、遅れて展開したために、北部地域では毛皮交易に巻きこまれた時期は遅い、というのがこれまでの通説であった。

筆者らがラブラドル半島の北端にあるヌネンガック (Nunaingok) 遺跡 (JcDe-1) で実施した考古学調査の結果、パレオ・エスキモー (Palaeo-Eskimo)²⁾に属するドーセット文化期 (2500~1500BP) からネオ・エスキモー (Neo-Eskimo) 期 (500BP~現在)³⁾まで、海洋資源の豊富なポリニア環境下などにおける長期間の資源利用の実態が明らかになった。

出土した動物遺物の分析の結果は、ラブラドル・パレオ・エスキモーに特徴的な、劣悪な自然条件を避けて、夏から秋はフィヨルドの内陸奥深くに居住し、冬から秋にかけては、開水面猟のために定着氷の縁に張り付く典型的な集落・生業形態のあり方が、ネオ・エスキモー期の各段階 (「チューレ」 (Thule)・「漸移期」・「歴史期」) で徐々に変化し、19世紀には、すでに毛皮交易に特化した生業活動が実施されることを示唆している。その主要対象品目は、各種歴史的文献資料によっても裏付けられるように、キツネであるが、特定のアザラシを、ヨーロッパ人からの商業交易品である網などを利用して集中的に捕獲す

ることもこの時期を特徴づけている。

アザラシは1960年代以降、商業的毛皮なめし技術が開発されて商品化が可能になって以来、新たに毛皮取引品目に取り入れられることが知られている。しかし、この段階では、冬の集中的なキツネ猟を成功裏に実施するための越冬食料の確保がアザラシに求められていた可能性がある。さらに、18世紀には大型家屋に多人数が集住するような集落・住居形態の変化 (Communal House Living) がみられるが、これは増大した人口を維持する上で、他集団のための効率的な資源獲得に対応したものであるとする見方が有力になっており (手塚 1999: 80-83)⁴⁾、ヌネンガック遺跡で捕まえられたアザラシも従来のように自己集落内部でのみ消費されていたと必ずしも考える必要性はない。近年の狩猟採集文化に関する研究では、商業用途に陸上資源が用いられることが強調されてきた。しかし漁撈活動で得られる資源もまた、毛皮交易の品目になりうる、またはそれを維持する資源たりうるという論点にも一定の解答が得られると考えている。

また、バフィン島周辺では、1800年代に活況を呈し、乱獲で衰退したために、それまで毛皮取引を副次的に実施していたに過ぎなかった英国および米国船の捕鯨者が、捕鯨活動から引退または退役した後に、毛皮交易に本格的に転身したことや、ニューファンドランド (Newfoundland) に基盤をおくタラ漁師の進出による影響がこれまで毛皮交易の後進地域であった北部ラブラドル地方におよんで、刺激を与えていたのではないかという見通しを提示したい。

2 東部極北圏とラブラドルの歴史・自然的環境

東部極北圏地域は、通常、動植物や地形・地質の相違から、マッケンジー川以東のカナダ極北地方とグリーンランドまでをさす (図1)。16世紀頃から南西グリーンランドやラブラドル、バフィン島など一部地域では、ヨーロッパ人との接触が行われたが、東部極北圏全域で恒常的な接触が行われるようになるのは、捕鯨者が多数出入りする19世紀以降のことであろう。ラブラドル・イヌイットは全極北圏に居住するエスキモー集団⁵⁾の内、もっとも低緯度に位置する集団であり、ヨーロッパ捕鯨者やタラ漁師の進出が16世紀以降次第に活発になり、他地域よりも長い欧米人との接触の歴史を有しており、とりわけ1752年の夏にモラヴィア派修道士がクジラヒゲを探索する目的を帯びたイギリス海軍軍人に伴われてラブラドルを訪れて以来、宣教師たちは、布教活動を通じ、エスキモーの生活様式や集落の規模、人口を推定するのに有用な記録を残し始めた。

現在約4800人の人口を擁する⁶⁾ラブラドル・イヌイットは、ラブラドル地方や北東ケベック地区に居住している。そのほとんどは本部がネインにあるラブラドル・イヌイット・アソシエーションに所属し、全エスキモー集団のうち、最終的な土地権利協定が依然締結されていない唯一のイヌイットである。

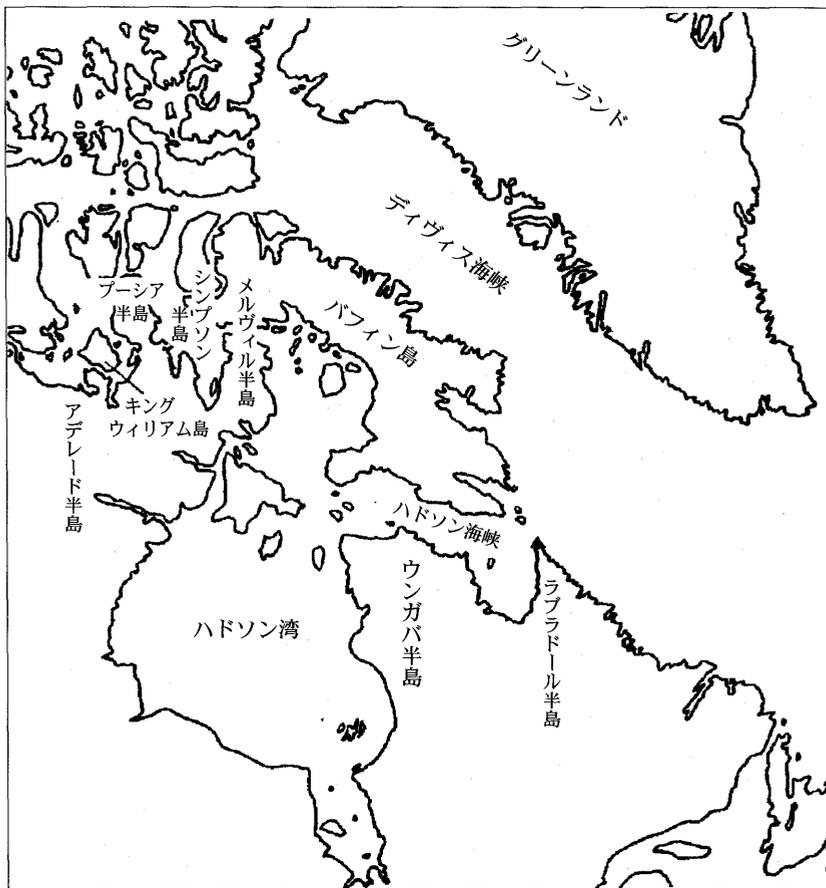


図1 東部北極圏の地名

自然条件の点では、大西洋の温暖な気候と亜極北環境によって、寒冷で厳しい極北の自然条件は他の極北地域に比して、幾分緩和されている。

2.1 ラブラドルの歴史的背景

1540年以降、バスク人によるタラ漁や捕鯨が開始されると、ニューファンドランドとラブラドル半島南部の沿岸地帯に捕鯨基地が形成される。ニューファンドランドとラブラドル半島を隔てるベルアイル海峡のレッドベイ (Red Bay) には、1000人の捕鯨者が採油活動に従事していた。イヌイットとバスクの間の直接的な接触を裏付ける証拠は少ないが、17世紀に入ると、ヨーロッパ人漁師との間で、必ずしも良好なものとはいえなかった接触が生じ、しばしば金属製品などの略奪に発展することがあった。

18世紀の前半にかけて、イヌイットはオランダの捕鯨者たちとクジラヒゲ、セイウチの牙、毛皮などを積極的に交易するようになっていった。やがてラブラドル南部を中心に通年で居住し、漁業活動を行うようになったフランス人植民者との間で、エスキモーの季

節的な居住地を舞台にクジラヒゲを中心に、油、毛皮などの交易が実施された。1771年のパリ条約でフランスに代わってラブラドールの支配に乗り出したイギリスは、ホープデール (Hopedale) の南に交易所を設け、イヌイットと定期的な交易を行って、食料品などの見返りにクジラヒゲ、油脂、労働力を入手した。その一方でイギリスはグリーンランドからモラヴィア派修道士を招き、布教活動を認めると同時に、その力を利用して、南部のイギリス漁業に影響が及ばないようにした。1771年のネインを手始めに、1904年にミッション最後の交易所が半島北端のポートパウエルに設置されるまで、ラブラドール全域でミッションの交易所が次々と開設され、その周辺に永続的なエスモー集落が形成された (Taylor 1984: 511-512)。

したがってラブラドールには、ミッションの活動が早く、先住民に関する記述 (人口や生活) が他地域に比して充実しているという特徴がある。

ヌネンガック遺跡はラブラドール半島の北端に位置し、1910年頃まではイヌイットがそこに居住していて、付近には好適な狩猟場や漁場が存在していた。1877年の時点で、集落の廃虚と、ここ一年以内に確実に住んでいた2~3軒の芝士住居がみられたとの記載がある (Bell 1885: 18-19)。リーチマンの1988年に実施された民族学的調査によれば、1811年にこの集落が旅行記にあらわれ、1884年にポートパウエル (Port Burwell) 気象測候所が設立された当時も、この集落は、依然使用され続けていたという。一年中アザラシと魚がとれ、カリブーの多い内陸へのアクセスも容易であったと書かれている (Leechman 1950: 200)。

1920年代にはラブラドール全域で高価なキツネの捕獲に一喜一憂するイヌイットの姿が民族誌に描かれている (Hutton 1912: 226-229; Leacock and Rothschild 1994: 122-123)。

この地で各種のキツネの罾猟キャンプを行った経験のあるイヌイット老人からの聞き取り調査の結果、1920年代以降には、イヌイットはすでにヌネンガック遺跡を冬の拠点集落として利用しなくなっており、冬のホッキョクキツネ猟やその他の季節に一時的なキャンプ地として利用しているに過ぎず、しかも風が強すぎてキャンプ地としては不向きであるという (岸上 1989: 1)。

2.2 ラブラドールの自然的特徴

ラブラドール半島の東は直接大西洋に面し、豊富な海洋資源に恵まれているが、その一方で、ラブラドール海流 (寒流) の影響を受けて低緯度にもかかわらず、寒冷であり、冬には沿岸地帯の大半に海水が接岸する (Taylor 1984: 508)。

ラブラドール半島の中央には、トーンガット山脈が縦走し、海岸部では深くジグザグに入り組んだ海岸フィヨルドが卓越している。フィヨルドの中や外洋には無数の小さな島が存在しており、エスキモーによって利用されてきた。オカックの北方に位置するナパクトック湾より北には樹木が生えない、ツンドラ地帯となっている。

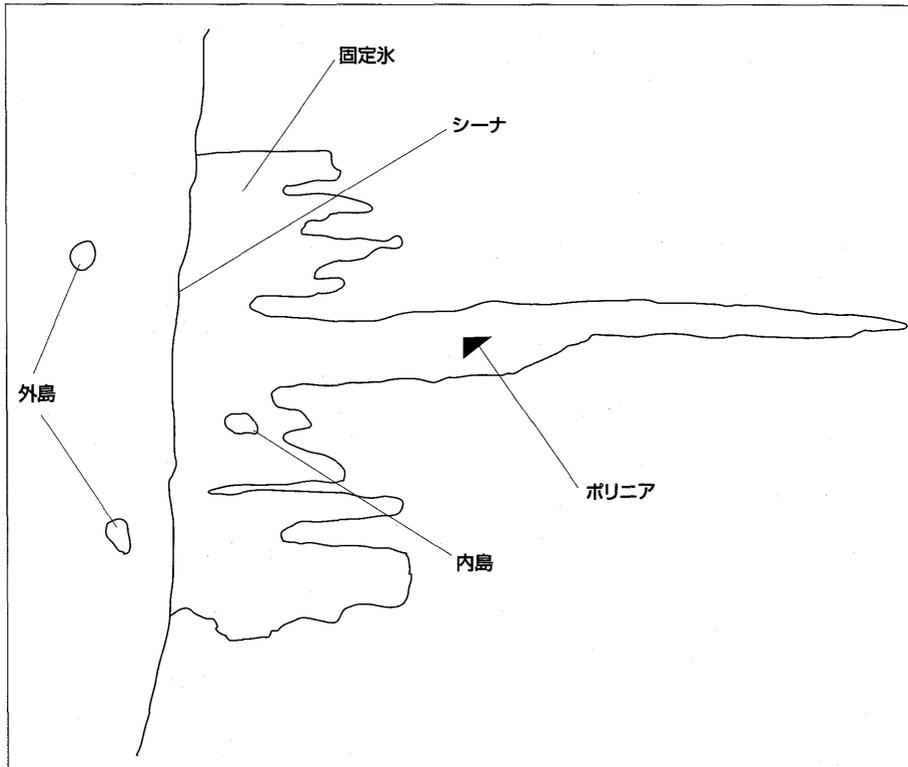


図2 フィヨルド地形のポリニアとシーナ

その年の自然条件によって変動することが多く、安定して出現するわけではないが、冬にフィヨルドを覆う固定氷の中で厳冬期でも結水しない開水面であるポリニア (Polynia) とシーナ (Sina)⁷⁾ (図2) がラブラドルを特徴づけている。

エスキモーが利用する植物資源としては根茎類の利用が特徴的である。水鳥の卵が大量に捕獲される例が知られているが、時期は5~6月に限定される。

陸上動物中もっとも利用価値が高いのは、内陸の高原地帯に生息するカリブーであるが、季節移動の際は、小グループに別れ、海岸部地方に現れることもある。漁撈資源としては4種のアザラシとホッキョククジラ、セイウチ、シロイルカなどがあげられる。アゴヒゲアザラシなど嫌水性のアザラシは、通常海水の移動とともに、春に北上し、秋に南下する。この地域でみられる代表的な魚種としてはホッキョクイワナ、サケ、タラ、カペリンなどである。

3 ヌネンガック遺跡

ヌネンガック遺跡は、ラブラドル半島の北端のキリネック島を半島から隔てるマクレ

ラン海峡とその南西部に位置するヤングインレットに挟まれた細長い舌状台地の西側先端に位置する (図3)。ヌネンガックは「秘密の場所」の意味のイヌイット語に由来するが、悪天候のもとでも東の太平洋や西のハドソン湾からの暴風やブリザードの被害を和らげてくれる場所となっている。

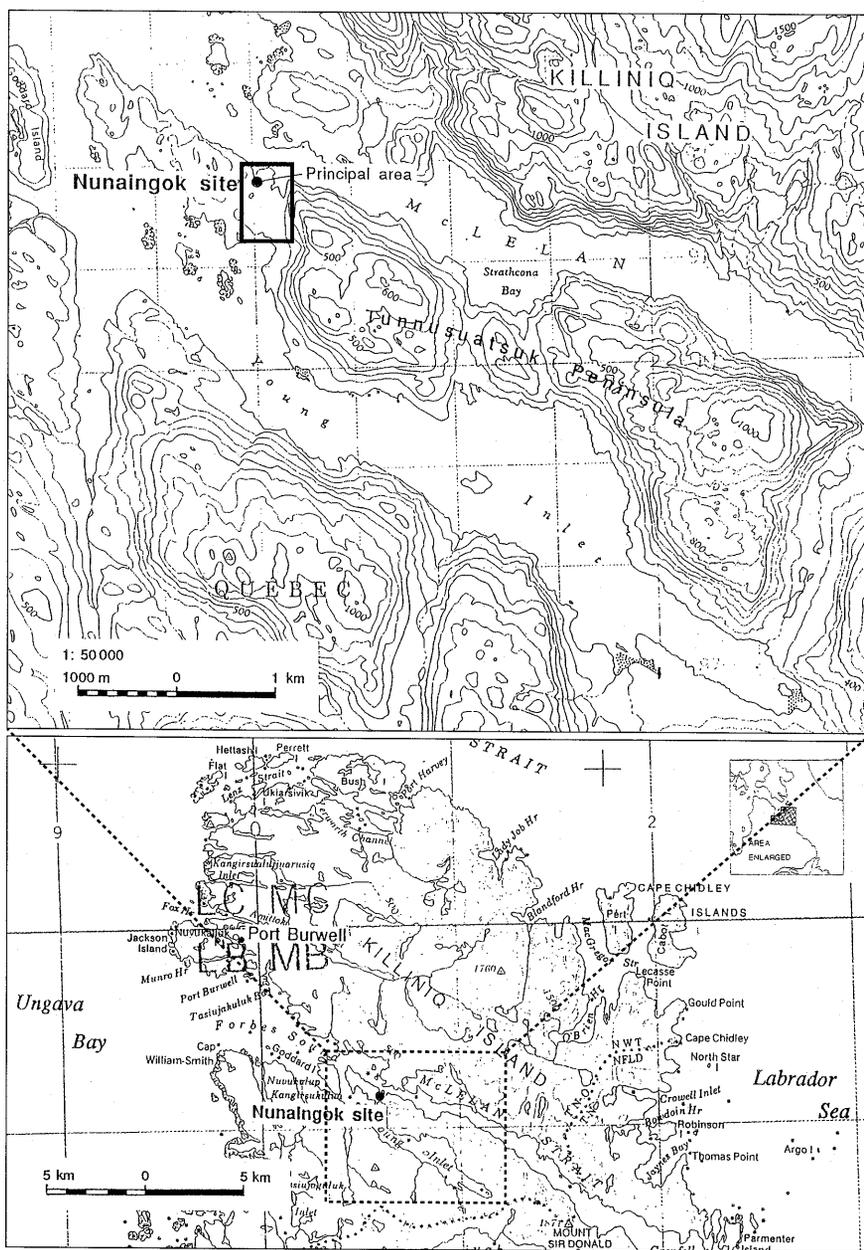


図3 ヌネンガック遺跡の立地

発掘調査は、スチュアート ヘンリを調査団長とする日本人調査チーム（山浦清，天野哲也，白杵勲，花海義人，亀田直美，手塚薫）によって1987年と1988年の2カ年に渡り，文部省科学研究費補助金（国際学術研究／研究代表者スチュアート ヘンリ／課題名「東部極北圏先・原史エスキモー文化の研究」／課題番号62041103・63041122）の補助を受けて実施された。

3.1 遺跡の立地

遺跡を取り囲むように，東方に300mのアナハットック山（仮称），西方に海拔約60mのウエスト尾根が位置し，外洋に出るにも，内陸高原地帯に向かうのにも好適な立地条件を有している。潮の流れが激しい細いマクレラン海峡に面した標高20mの平坦部に14軒の芝士住居址（極北の植生を含む土壌を壁や屋根に積み上げた堅穴住居）が確認でき，東部極北圏でも有数の規模をほこる大集落である（図4）しかし，このような大規模な越冬集落の住居がどの程度，同時に使用されていたかについては慎重でなければならない（Park 1997: 281-283; 1998: 123）。

マクレラン海峡は激しい潮流が渦巻き，厳冬期にも結氷しないポリニアが出現しやすい地理的条件にあったので，季節移動をしないアザラシをこの海域で，複雑で非生産的な呼吸穴猟法によらずとも開水面に適した猟法で捕らえることは十分可能だったと思われる。

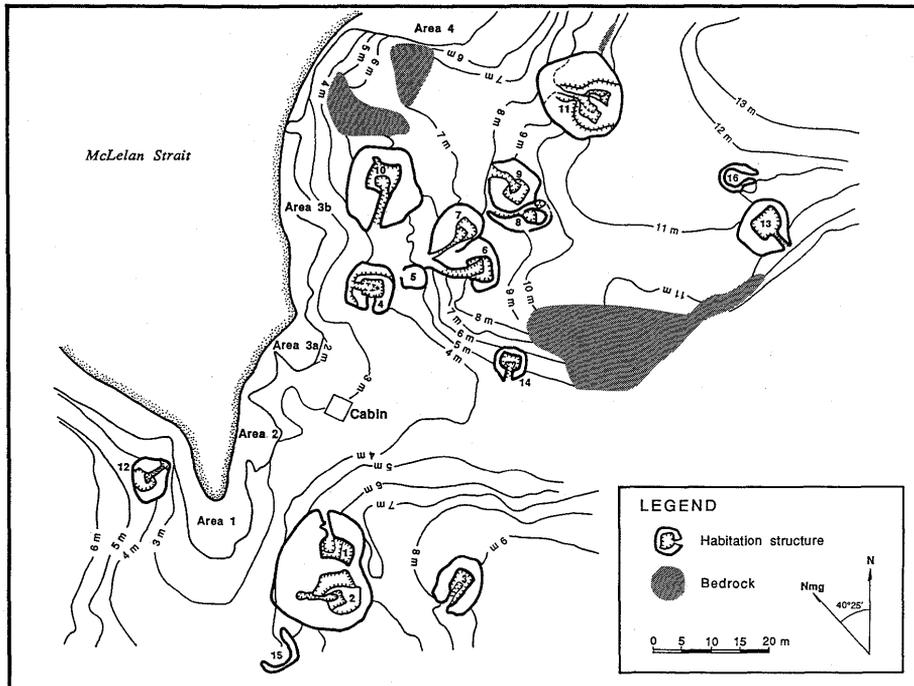


図4 ヌネンガック遺跡の芝士住居集落 (Avataq Cultural Institute 1990)

3.2 発掘調査した住居址

ヌネンガック遺跡では、3号住居址と12号住居址を発掘した。この住居の出土品の分析から3号住居はチューレ文化期から接触期にいたるまで利用されていたことが明らかとなった。主室の寸法は南北3.7m、東西3.3mであり、北壁に沿って床面より30cm高い幅1.3mの主に寝台の用をなしていた、床面より一段高いプラットフォームが確認された。主室南方にはコールドトラップ⁸⁾の痕跡が見られ、入口通路に連なる。入口通路の途中には、人がはって出入りできる程度の高さ約60cm、幅約65cmの戸口があり、天井石が崩落せずに、ほぼ原位置にとどまっている。この入口通路は西側に90度屈曲して傾斜地にそって緩やかに下降してさらに下方に延びている。

出土遺物の分析や層位の検討から、住居の使用時期を3期に区分することが適当であろう。特に、比較的厚く堆積した最下層からはチューレ文化後期に由来する磨製頁岩石器や軟玉製ミニチュアウルナイフ⁹⁾などが検出され、チューレ文化が比較的安定した期間、ここに存在したことが窺い知れる(スチュアート 1989: 23)。上層では、骨角器や木器に混じり、ナイフ、葉莢、指貫、鉄製罌(トラバサミ)などの金属製品や板ガラス、ビーズ、型押し文様の入った革製品、陶磁器食器などの交易品も出土したことから、20世紀初頭までの使用時期を推定することができた(スチュアート 1988: 23-24)。

一方、入り江に面する急斜面に構築され、植生に厚く覆われていたため、発掘調査前にはパレオ・エスキモー期のものであろう推定されていた12号住居址は、ドーセット文化中期に相当する時期のものであることがわかった。ウンガバ湾周辺地域でこれまで確認されている複数の居住時期を有するドーセット期の堅穴住居と異なり、12号住居址の覆土は薄く、居住時期に断絶がみられず、その存続期間は短かったと推定された(スチュアート 1989: 23)。

3号住居がいつまで存続したかについては、民族誌や旅行者の記録からヌネンガックは、1920年代以降、一時的・季節的なキャンプ地として利用されたと考えて差し支えない。また、考古学的調査の結果、3号住居址は出遺物の特徴からその上限は1910年代より下のことはない結論づけられている(スチュアート 1988: 24)。

3.3 文化編年

カナダ東部、とりわけラブラドル地方に分布した先史諸文化の編年は通常、次のように考えられている。

プレ・ドーセット文化→ドーセット文化→チューレ文化→イヌイット文化

このうち、ドーセット文化までを、エスキモーの生活様式を保持しているが、直接の祖先かどうか現状では確認できないという意味で、パレオ・エスキモーと呼称し、チューレ以降の文化の担い手は歴史期以降におけるラブラドル・イヌイットの直接の祖先であ

ることが確実視されているので、ネオ・エスキモーと呼称するのが慣用的な呼称である。

極北小型石器伝統に属するプレ・ドーセット文化(3700~2800BP)はフォックス盆地、ハドソン海峡、ハドソン湾を中心に分布し、ドーセット文化の母体となった。直接的な証拠はないが、皮張りボートやスノーナイフ¹⁰が存在し、夏はテントでの生活が主体で、冬期間は雪の家の使用が中心であったと推定されている。また、イヌの骨は見つかっているが、イヌ引き橇がなく、荷物を犬の背に載せて運ぶ利用法が中心であったと推測されている。極北で弓が初めて使用され、南のマリタイム・アーケイック文化に伝えられる一方、回転式離頭銛が同文化から伝播したと考えられている。ラブラドルではネインまでプレ・ドーセット文化が南下し、沿岸の海棲哺乳類と内陸のカリブーに生業経済の基盤をおいていた。

フォックス盆地で成立し、それまでのどの極北に存在した文化より極地に適応をとげたといわれるドーセット文化(2800~1000BP)は、住居も大型化し、遺跡もプレ・ドーセット文化よりもはるかに広い範囲に分布している。南はニューファンランドにまで拡大し、そこで約千年間存続した。

ドーセット文化の前半には極北地帯は寒冷化し、海水域が一年の大半は結氷していたと考えられているので、食料の基盤はファイアザラシに求められた。アイスクリーパー¹¹や滑走版¹²の発明は、海氷上で銛を用いたアザラシの呼吸穴猟の技術が確立し、十分に発達したことを示している(McMillan 1995: 261)。イヌの骨は皆無に近い状態なので、イヌは存在しなかったか、いたとしても橇イヌなどの家畜として利用されることはなかったであろう。また、開水面で使用される、銛につなげる大型の浮き袋が見つからないので、後世のエスキモーによって実施されたような皮舟を使つての大型海性哺乳動物を対象とした効率的な狩猟が積極的に行えたかどうかは疑問である。

物質文化中、弓と弓ドリルも存在していない。しかし、石ランプとスノーナイフが見出されるので、雪の家が作られたことは推測できる。ドーセット文化では雪の家だけでなく、竪穴住居も使われることが多かった。

ドーセット文化は、極北圏全体で1000BP頃に消滅するが、ラブラドルではチューレが進出するといわれる600BP頃まで存続していた可能性がある。アラスカから極北全域に拡大したチューレ文化によって放逐もしくは吸収されたというのが定説であるが、近年異論も提示されている(Park 1993: 225-226)。

ベーリング海周辺で、新たな海洋適応技術を開発したチューレ文化は、1000BPまでにカナダ極北圏全体に拡散し、先行したドーセット文化に交代した。この技術には、大型の皮製ボート(ウミアック)や浮き付き銛を用いた、開水面でのクジラを含む大型海棲哺乳類を狩猟する技術が含まれる。また大型犬や橇イヌの引き具の出土から、大型のイヌ橇が使用されて、チューレ人の活動範囲を大きく広げることに貢献した。ラブラドルには北方のバフィン島から600BP頃にラブラドル半島北部に到達したと考えられている

(Schledermann 1971: 69)。

3.4 動物遺存体の分析

ドーセット中期に相当する12号住居址の動物遺存体は、堆積が薄く、文化層も1つのため、一時期に蓄積されたと判断した。また、堆積が厚く、文化層も3つに区分できる3号住居址のものは、最下層をチューレ後期～接触期初期に相当する時期のもの (Late Thule-Early Contact)、最上層は19世紀を中心に1910年代までに相当する時期のものと区分できた (Historic Inuit)。その中間は薄く、有機物や炭化物も少なかったため層位として確実に捉えることができたとはいえないが、接触期初期から歴史期への漸移層と見ることも可能であろう。その場合は、上下二つの文化層に挟まれた中間の時期である、18世紀を中心とした時期をひとまず想定することができよう。近年、自然環境データの復元に基づき、18世紀はラブラドル全体で海氷の分布が拡大し、イヌイットのアザラシ資源の利用状況に多大な影響を及ぼしていたとする研究成果が発表されている (Woollett 1999; Woollett, Henshaw and Wake 2000)。この漸移層が、ヌネンガック遺跡のポリニア環境下における豊かなアザラシ資源を利用できなかった時期のネオ・エスキモーによる資源利用状態を反映しているという可能性もあろう。ただし、遺構の有機質遺物については、複数の文化層にまたがる資料も多く、中間の文化層のものとして処理されたケースも実際の遺物の取り上げではみられた。したがって、本来なら特定の文化時期に所属するはずの遺物が複数の文化層のどこに所属するのか不明なものもあり、混和状態を示すものとして処理された場合もあるので、混和層 (Mixed) と名づけた方がより適切かもしれない。幸いなことにこの漸移期で出土した骨を中心とする有機質遺物の総量は上下二つの文化層に比べ、きわめて微量であるため、大きな混乱を招く危険性はないと判断される (表1)。

表1 12号住居址と3号住居址出土動物遺存体の出土量と出現率 (Woollett 1991)

文化層 種別	12号住居址	百分率	3号住居址	百分率	3号住居址	百分率	3号住居址	百分率
	ドーセット中期		初期接触期		漸移期		歴史期	
軟体類			1	0.1			22	0.5
魚類							1	0.02
鳥類	1	0.7	22	3.3	11	5.8	130	3.2
陸獣類	17	12.7	135	20.1	34	17.9	785	19.0
海獣類	102	76.1	488	72.6	126	66.3	2876	69.8
不明種	14	10.4	26	3.9	19	10.0	309	7.5
総計	134		672		190		4123	

このようにして取り上げられた動物遺物は、分析のため、カナダのアルバータ大学に送られ、James Woollett 氏によって種の同定やカウントなどが行われた。この時提出された動物遺存体に関する報告書によってヌネンガック遺跡出土の資源利用の実態が明らかにされた (Woollett 1991)。そして、ドーセット中期 (Middle Dorset)、チューレ後期～初期接触期 (Late Thule/Early Contact)、漸移期 (Mixed)、歴史イヌイト (Historic Inuit) の4時期の異なる各文化組成ごとの出土骨の全体量を表1と図5で見ると、同定が可能だった5種類の動物遺存体 (軟体動物・鳥類・魚類・陸獣・海獣) の出現頻度が理解できる。

どの時期の文化組成でも海獣が全体の約7割を占め、カリブーを中心とする陸獣の利用状況もドーセット中期の12号住居址で約13%と若干低かったが、他の時期はいずれも20%前後を推移している。ドーセット期には呼吸穴猟は完成していたとされるが、フロート付きの銚頭猟は存在せず、十分な開水面猟は実施できなかったとされる。

しかし、ヌネンガックのドーセット中期には、各文化期を通じて最大の76.1%という数値に表れているように、アザラシを中心とする海獣に最も深く依存している。そのことは銚のフロートに頼らない猟法でも、十分にアザラシを捕獲できたことを示している。しかも嫌氷性のゼニガタアザラシ (ringed seal) と海水に呼吸穴を築くことのできる好氷性のフイリアザラシ (harbour seal) を同量づつ捕らえ、それ以外に、獲得量は半分程度になるが、季節移動を行うタテゴトアザラシ (harp seal) も捕獲しているのである (図5)。

パレオ・エスキモーとネオ・エスキモーのカリブーの利用頻度における相違が、遺跡を利用する季節の違いを表しているのか、動物量の変動を表しているのか不明だが、両者の資源利用状況の違いを反映している。ポリニアを有する豊かな海洋資源に加え、現在の観察結果に基づく限り、小規模な群れでヌネンガックに接近するカリブーを捕獲できる自然環境にあったことを裏付けている。

一方で、海に面した遺跡の立地から、入手しやすかったはずの魚類資源はどの時期の文化組成でも低く、最大の捕獲量を示した3号住居の歴史期イヌイトですら、全体の0.02%に過ぎない。これは他のカナダ高緯度極北圏チューレ段階に相当する遺跡の動物利用の実態とも異なる特異な現象である。

鳥類は、ドーセット期で1%に満たず、「チューレ後期～初期接触期」と「歴史期」では3%台だが、「漸移期」では逆に約6%に達している。漸移期での鳥の利用が盛んなのは、代替食料の入手が困難だったことを示唆しているのかもしれない。

ドーセット期には、他の極北圏遺跡同様にイヌが含まれていないが、大型の飼育犬の骨がチューレ後期～初期接触期、漸移期、歴史期のすべてに発見されている。

同様にホッキョククマ (polar bear) の骨もドーセット以外のすべての文化組成の中に見られる。キツネが漸移期に初めて出現し、歴史期にはキツネ (red fox)、ホッキョクギツネ (arctic fox)、ホッキョクウサギ (arctic hare) と多様な毛皮獣が出土する (図6)。自らの食料や毛皮を確保する用途でこれらの毛皮獣を捕らえていたのであれば、ドーセット中

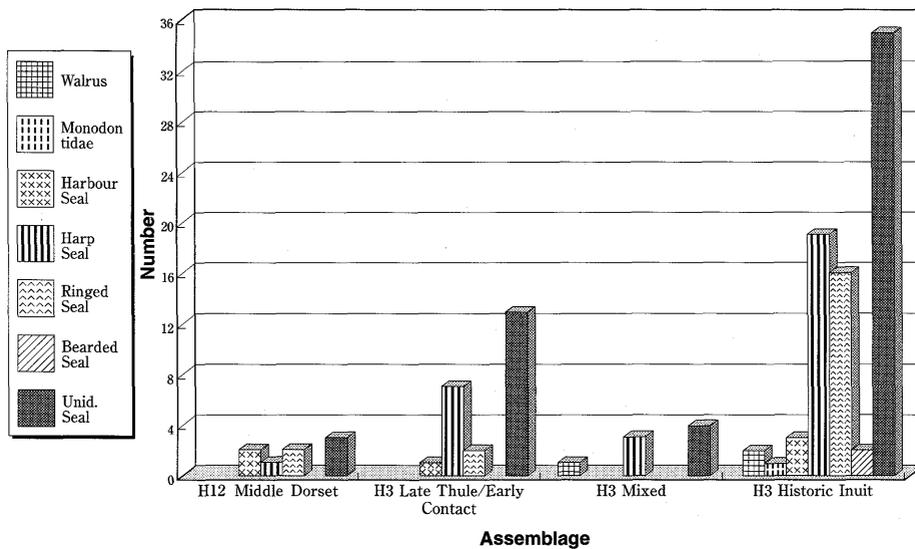


図5 各文化層出土海獣骨に基づく最小個体数

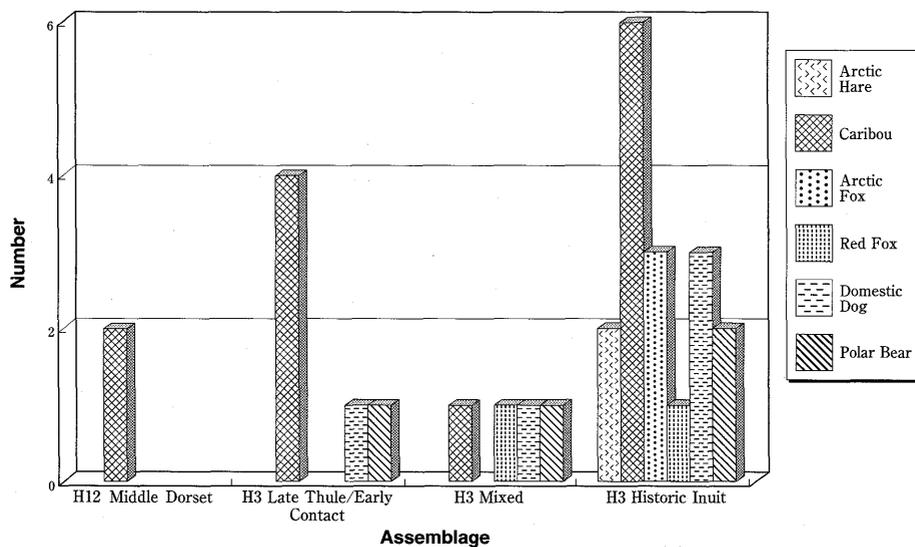


図6 各文化層出土陸獣骨に基づく最小個体数

期やチュール後期～初期接触期、漸移期にもこれらの動物が出現してもいいはずであるが、そのような様子を窺うことはできない。やはり、毛皮交易がこの地域に及んだ影響を考慮する方が自然だと思われる。

4 資源と土地の利用

4.1 パレオ・エスキモー／ネオ・エスキモーの生業・集落形態

ラブラドルにおけるドーセット・エスキモーの集落立地の代表的なパターンは、夏から秋にかけては荒天の影響から身を守るフィヨルドの奥深くに潜み、漁撈を行うが、比較的天候の安定する冬から春にかけては、シーナより外洋に位置する外島に集落を移し、定着水の縁でアザラシを対象とする海水面猟を実施していたというものであった (Cox and Spiess 1980: 665)。したがって、冬から春にかけての集落遺跡からは、呼吸穴を形成できない、幼獣や新生獣の出土割合が多いという報告がなされている (上掲書)。

一方、呼吸穴猟の技術をさらに発展・開花させたチュール期以降は、シーナでの猟法に加え、呼吸穴猟も盛んになる。まだ初冬の薄い海氷に作られた呼吸穴は、集落のそばにあるために利用しやすいが、アザラシは冬が深まるとともに薄い氷を求めて沖合いに移動して呼吸穴を形成するようになる。雪が積もるとハンターは呼吸穴の発見が困難になり、集落との距離が離れるようになるにつれて、さらに集落との往復や発見に困難がともなうようになる。アザラシの匂いを手がかりに呼吸穴を探し求めたり、イヌ橇で獲物やハンターを運ぶ上でも、イヌの利用がこの猟法には不可欠となる。

4.2 狩猟時期と狩猟法の復元

宣教師や探検家の記録を分析してラブラドル・イヌイットの周年活動を復元した研究によれば、おおよそ次のような集落・生業形態を描き出すことができる (Taylor 1984; Turner 1780; 手塚 1990: 627-629) (図7)。

夏：6月下旬に湾内の氷がすべて沖合いに出尽くすと、春のキャンプ地から湾内の集合地点への移動が開始される。湾内ではアザラシ、シロイルカをカヤックで捕らえることができた。湾内の氷が完全に消滅すると、まずホッキョクイワナ、続いてサケ、さらに遅れてタラなどの漁撈資源を利用できる体勢が整った。

秋：8月上旬には、カリブーの毛皮を入手するために内陸高原地帯へ狩猟集団が派遣された。カリブー猟に出かけたグループ以外の人々はそのまま沿岸地帯に居残り、彼らの分まで冬の保存食となる魚を獲り続け、カッシュ (cache)¹³⁾に貯蔵する。

冬：内陸のカリブー猟と沿岸部の漁撈が終わると、湾内の開口部や内島にある冬のキャンプ地に戻り、芝土住居の補修を行い、越冬の準備に入る。10月には季節移動のため南下するタテゴトアザラシを待ち受け、カヤック猟を実施する。場所によってはホッキョククジ

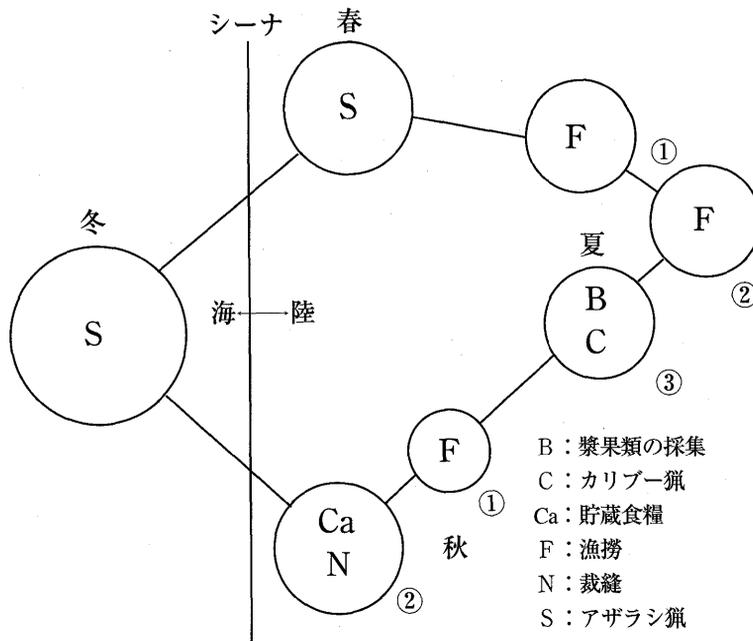


図7 ラブラドル・イヌイットの集落・生業形態モデル

ラ胤も重要な生業活動であった。海水が発達してアザラシが呼吸穴を作ると、比較的薄い氷に作られ、発見しやすい呼吸穴でアザラシ胤を開始する。2月までに主にこの胤法で捕獲できるアザラシの3割は季節移動をしないアゴヒゲアザラシであり、残りは定着性の高いフイリアザラシないしは他の種である。当初は冬集落のそばで実施されるが、次第にそこを離れ、数日間の狩猟の旅が行われる。シーナやポリニアなどの開水面近くの氷上にいるアザラシに忍び寄るウタック胤法が効果的であった。3月と4月にはウタック胤の他、人工的に作った呼吸穴にアザラシをおびき寄せる方法も試みられた。氷を割って水面下にいるタラ胤が盛んに実施される。この時期になると、開水面近くのアザラシ胤が可能な地点に雪の家の集落が形成されることもあったが、陸地に築かれた芝士住居からなる集落がベースキャンプとしての性格を有した。10月中旬から4月下旬にかけて上記の活動で十分な食料を確保できない場合は、次のいずれかの方法が取られた。内陸のカリブー胤、湖や河川での釣胤、もしくは秋にカッシュに貯蔵された魚を取りに行くための少数のグループが拠点集落から繰りだされた。

春：海水が緩み出す5月下旬から6月上旬に海氷上の住居（雪の家）を出て、島か海岸地方へ戻り、テントによる生活が始まる。冬に比べ、集落規模は小型になる。春のアザラシ胤は呼吸穴が発見しやすく、ハンターが連携する必要も薄れ、イヌの助けも不要になる。装備も胤法も簡略化し、獲物の収獲効率も上がる。

このようにラブラドル・エスキモーは、冬は沿岸部の芝士住居からなる拠点集落の中

心に据え、海氷条件の推移に応じて、場合によっては雪の家を用いながら、周辺部の資源開発に的を絞った小人数の生産グループを送り込むことが特徴となっている。この意味からいえば、ヌネンガック遺跡は典型的な冬の拠点集落とみなすことができる。

4.3 資源利用にみられる特徴の時期的変化

ドーセット期にはゴマフアザラシを除く3種のアザラシを利用しており、食料資源としての依存度も高い。各文化期の動物遺物中、最大のアザラシ骨出土の割合を示す。他の時期に比して大型で定着性が強く、開水面を好み、嫌氷という習性を有するゼニガタアザラシの利用頻度が高いのがこの期の特徴となっている(図5)。

「チューレ期～初期接触期」にはアザラシ組成の逆転が起こり、タテゴトが突出して、その後、「歴史期」まで首位の座を維持する。2番目はファイリであり、ゼニガタがそれに続く。歴史期はこの順位を維持し、他にアゴヒゲアザラシが加わる。「漸移期」以降、セイウチが出現し、歴史期にはクジラ類も加わる(図5)。

毛皮が取れる交易品ともなる動物(キツネ、クマ、ウサギ?)の捕獲が歴史期以降、徐々に高まる傾向を確認できる(図6)。

なお、イヌの存在は効率的なアザラシ猟に不可欠であることはすでに指摘したが、歴史期イヌイットがイヌに依存した猟法を採用していることはつとに知られている。

5 ラブラドルにおける毛皮交易の発展

20世紀初頭になるとカナダ東部極北圏のイヌイットは、捕鯨者とホッキョクキツネの毛皮を交易し始めた。やがて1910年代からは、ハドソン湾会社が交通の要所に交易所を設け、イヌイットと直接取引を行うようになる。第一次大戦中とその後の1920年代には毛皮価格が高騰して、極北地域の毛皮交易は最盛期を迎えた。こうしてイヌイットは冬期のホッキョクキツネ猟を中心的な生業活動として選択し、交易所が毛皮との交換で提供する物資への依存度合いを深め、外部の市場経済に併合され、その一翼を担うこととなった。

5.1 毛皮交易への参入

20世紀初頭のイヌイットの主要な交易相手は、捕鯨者もしくは退役捕鯨者(ex-whaler)であるが、当初、その取引量は1920年代のそれと比べると規模は小さく、本格的な毛皮交易の幕開けはハドソン湾交易会社が進出してからとされる(Damas 1996: 376)。ハドソン湾会社は交易所を東部極北圏に数十ヶ所設け、毛皮交易のネットワークを構築し、多数のイヌイットのハンターを毛皮交易のシステムの中に取り込んでいった。会社は亜極北地域で使っていた「前貸し制度」を極北圏にも適用した。それは、前年のハンターの狩猟実績に見合う金額を上限として、冬の猟に出かけるハンターに食料や弾薬などの貸付を行う

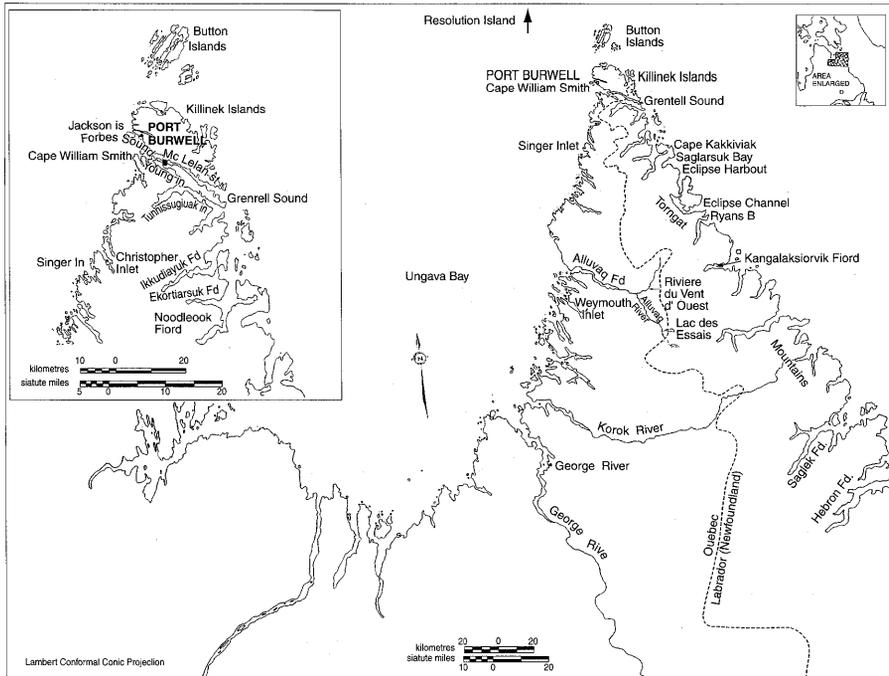


図8 ラブラドル・イヌイットの土地利用形態関係図 (Val 1976)

表2 ラブラドル・イヌイットにおける狩猟活動との土地利用の時期的変化 (Val 1976)

狩猟形態	アザラシ猟 とその猟場
時期	
ピリオド2 (～1959)	Alluvaq Fjord - Button Islands - Hebron Fjord
ピリオド3 (1959～1974)	George River - Button Islands - Hebron Fjord
狩猟形態	カリブー猟 とその猟場
時期	
ピリオド2 (～1959)	Alluvaq Fjord - Riviere du Vent d' Ouest - Lac des Essais
ピリオド3 (1959～1974)	Alluvaq Fjord - Riviere du Vent d' Ouest - Lac des Essais
狩猟形態	キツネ毘猟 とその猟場
時期	
ピリオド2 (～1959)	Alluvaq Fjord - Killinek Islands
ピリオド3 (1959～1974)	Singer Inlet - Killinek Islands

というものである。この方法の導入は、イヌイットの狩猟効率を高めるとともに特定の交易所との依存関係が形成された。交易人が交易所に常駐し、イヌイットと銃、弾薬、鉄製農具、魚網、ボート、はさみ、ナイフ、やかん、針、生地、紅茶、砂糖、小麦粉、干しぶどうを交換した (Graburn 1969: 125-126; 岸上 2001: 334)。ヌネンガック遺跡から出土する物質文化には、遺跡に残存しにくい食料品を除けば、このようなものがほとんど含まれ

ている。

5.2 取引される毛皮品目の変化とその背景

イヌイットの毛皮交易を概観した場合、大恐慌や第二次世界大戦の影響が見られたものの、1920年代から1960年代までの時期の主要な交易品は、ホッキョクキツネの毛皮であり、1961年にノルウェーでアザラシの毛皮なめし技術が開発されると、アザラシの毛皮が主要な交易品となって流通した(岸上 2001: 335)。アザラシ皮は1983年にヨーロッパ共同体が輸入を禁止し、毛皮市場が崩壊するまで、イヌイットの重要な現金収入源であった。

この間の経緯は、カナダ政府が実施したラブラドル半島全域の土地利用形態の結果とも一致している(Val 1976: 121-122)。この調査の土地利用をまとめた結果から、ピリオド2(～1959年)とピリオド3(1959年～1974年)をアザラシ猟、カリブー猟、キツネ猟について比較すると、カリブー猟は時期による土地利用の違いが見られないが、アザラシ猟とキツネ猟では狩猟範囲の反比例現象が見られる(図8, 表2)。すなわち、ピリオド2から3になると、キツネ猟の範囲はシンガー・インレット(Singer Inlet)からキリネック島(Killinek Islands)にかけての北西部への縮小が見られるが、逆にアザラシ猟はジョージ川(George River)からヘブロン(Hebron)までのほぼ半島全域に活動領域を拡大しているのがわかる。

6 おわりに

17世紀から、海の資源、たとえば、クジラヒゲやアザラシ皮がヨーロッパ人との交易で取り引きされてきたことでもわかるように、陸獣だけが毛皮交易品目となるのではない。しかし、ヌネンガックの「歴史期」に見られるアザラシの集中的な利用は、外部経済への参入を目的としているというよりは、自分たちを中心とする消費に当てられていたと考えるのが合理的であろう。

1800年代、英国や米国の捕鯨猟が活発であり、捕鯨シーズンが終わってから、その土地のイヌイットとの間で二次的に毛皮交易を繰り広げてきた。しかし乱獲でクジラが減少すると、捕鯨は徐々に衰退し、元捕鯨者あるいは退役捕鯨者が毛皮交易に積極的に参入ようになる。この過程で、ラブラドル南部や北東沿岸のベースキャンプとバフィン島をつなぐルート上に位置するヌネンガックは、毛皮交易に取り込まれ、利用された可能性がある。毛皮交易史に関する研究からは、1910年代に冬のホッキョクキツネの猟猟が開始されたことになっているが、ヌネンガック遺跡では、キツネの出土が1910年までの文化層から出土し、毛皮の見返りにイヌイットの手に渡った交易品がすでに多く見られるので、他のラブラドル中・南部地域よりもさらに早くに毛皮獣を捕獲し始めた可能性がある。あるいは文献に記録されるよりも以前に、少なくともラブラドルでは毛皮交易が徐々に

開始されていたのかもしれない。いずれにしても物質文化の点からは、毛皮交易への参入の時期がすでに始まっていたとみて差し支えない。

冬のホッキョクキツネの罨猟に専念し、それを成功させるためには、事前に十分な食糧の確保が重要となる(岸上 2001: 334-335)。その意味では毛皮交易時代においては、両者は互いに補完的な性格を有していると考えられる。ヌネンガックでは、周辺がキツネの好猟場だったことと、鉄製罨が出土していることから、ホッキョクキツネ猟とアザラシ猟が両立していた可能性が高い。

「歴史期」の文化層から質量ともに豊富なアザラシが出土したので、効率的で集中的なアザラシの罨猟を実施していた可能性が残されている。1920年代のハドソン湾会社の設置した交易所が活動を始める以前に、罨を入手していたことが推測されるが、その場合、1904年に遺跡のすぐ北方のポートパウエルにモラヴィア派宣教師の教会兼交易所が設置され、それ以前から仮設の臨時交易所が機能していたので(Val 1976: 121)、これらの施設が供給する物資にイヌイットが依存していたことが考えられる。

この文化層は19世紀中心の内容を反映していると考えられるので、クジラ資源の衰退によっていち早く、毛皮交易に参入した退役捕鯨者が、毛皮交易の発展に寄与しているのかもしれない。同時に、1860年代に毛皮交易の目的で北部ラブラドルに毎夏(6月~10月)1000~1200艘の船に分乗し、3万人におよぶ規模で流入したニューファンドランドのタラ漁師たちも、交易を促進するのに一役買っていたであろう(Taylor 1984: 512)。

その場合、自分たちの消費以上に、他人、および別集団のために食料の確保を行っていたことも想定に入れる必要がある。この後、罨や銃、舟の入手によってキャンプ形態が変化し、集落・生業形態の再編が加速される。1910年代でこの遺跡が終焉を迎えるのは、ミッションのそばにイヌイットの集落が形成されたことにより、ヨーロッパ製品に一層依存し始めたことが主要な原因であると考えられる。

謝 辞

ヌネンガック遺跡の発掘調査報告書の刊行前にデータの利用を快く認めてくださったスチュアートヘンリ氏と動物遺物の分析の労をとった James Woolett 氏に心より感謝申し上げます。また、ヌネンガック遺跡の土地利用に関するイヌイットへの民族調査を実施して、その成果の利用を認めてくださった岸上伸啓氏にもこの場を借りて感謝申し上げます。

註

- 1) ただしジェームス湾 (James Bay) やハドソン湾 (Hudson Bay) 東部の一部のイヌイットは、19世紀の半ば以降、不定期にハドソン湾会社 (Hudson Bay Company) が開設した交易所に毛皮資源を持ち込んで交易を行うようになった (Francis and Morantz 1983: 139-143)。

- 2) 現代のイヌイットと直接の系譜関係を有するかどうかも不明。
- 3) 現代のイヌイットと直接の系譜関係を有することが確認されている集団。
- 4) 近年、これとは別に遠出の逗留先で「交易人」が住んだ施設であるという解釈も提示されている (スチュアート・松本 2000: 29)。
- 5) シベリアからグリーンランドまで分布し、ユピック、イヌピアック、イヌイット、イヌヴィアルイト、カラーリットに区分される集団の総称。イヌイットは全エスキモー人口の6割程度しか占めていないので、エスキモーと同義ではない。また、ロシア、アラスカ、カナダ、グリーンランドに居住する極北先住民社会全体を指す自称が存在しないために、先史文化研究などでは「エスキモー」という用語がなお使用されている。
- 6) Labrador Inuit Association の公式 HP (<http://www.nunatsiavut.com>) の情報による。
- 7) 冬に海水が発達してフィヨルドを覆う固定氷の縁。シーナの内面にある島を内島、シーナより外の無氷開水面にある島を外島と呼び習わしている。
- 8) 入口通路と主室の接合部にある通路と主室床面よりレベルが低くなるように掘りくぼめられている場所。外部からの冷気流入を防ぐ。
- 9) 玩具か呪術的な目的に使用されたと思われる主に磨製頁岩製の三日月形をしたナイフ
- 10) 雪の家を作るためのブロックを切り出すためのブレードナイフ。この遺物の出土は、雪の家の建築技術が存在したことの間接的な証拠となる。
- 11) ブーツの底に縛り付けた、刻みのついた骨や牙製の滑り止め。
- 12) 乱氷地帯や無雪地帯を走るときに滑走部に取り付けて橇の破損を防ぐ。
- 13) 石組みの食料貯蔵施設。

文 献

Avataq Cultural Institute

1990 *The Avataq 1988 Archaeological Field School*. typed manuscript. pp.1-12.

Bell, Robert

1885 *Observations sur la Côte du Labrador le Détroit et la Baie d'Hudson. Rapport des Opérations à 1882-1883-1884*. Ottawa: Ministère de l'Intérieur Commission Géologique et d'Histoire Naturelle et du Musée.

Cox, Steven L. and Arthur Spiess

1980 Dorset Settlement and Subsistence in Northern Labrador. *Arctic* 33(3), 659-669.

Damas, D.

1996 Arctic from Norse Contact to Modern Times. In B. G. Trigger and W. E. Washburn (eds.) *The Cambridge History of the Native Peoples of the Americas* Vol.1, North America Part2, pp.329-399. Cambridge: Cambridge University Press.

Francis, Daniel and Toby Morantz

1983 *Partners in Furs: A History of the Fur Trade in Eastern James Bay 1600-1870*. Kingston and Montreal: McGill-Queen's University Press.

Graburn, N. H. H.

1969 *Eskimos Without Igloos*. Boston: Little, Boston and Company.

Hutton, S. K.

1912 *Among the Eskimos of Labrador*. London: Seeley, Service and Co. Ltd.

岸上伸啓

1989 『ヌネンガック遺跡と民族学的研究』タイプ原稿。

2001 「北米北方地域における先住民による諸資源の交易について—毛皮交易とその諸影響を中心に」『国立民族学博物館研究報告』25(3), 293-354。

Leacock, Eleanor B. and Nan A. Rothschild (eds.)

1994 *Labrador Winter*. Washington: Smithsonian Institution Press.

Leechman, D.

1950 *Eskimo Summer*. London: Museum Press Limited.

McMillan, Alan D.

1995 *Native Peoples and Cultures of Canada*. Vancouver: Douglas and McIntyre Ltd.

Park, Robert W.

1993 The Dorset-Thule Succession in Arctic North America: Assessing Claims for Culture Contact. *American Antiquity* 58(2), 203-234.

1997 Thule Winter Site Demography in the High Arctic. *American Antiquity* 62(2), 273-284.

1998 Demography and the Reconstruction of Social Organization from Thule Wintering Sites in Arctic Canada. *Canadian Journal of Archaeology* 22, 115-126.

Schledermann, Peter

1971 The Thule Tradition in Northern Labrador, unpublished M.A. thesis in anthropology, Memorial University of Newfoundland. St. John's.

スチュアート ヘンリ

1981 「極北先史文化の調査」『考古学ジャーナル』186, 16-20。

1988 「ウンガバ湾沿岸エスキモー文化調査」『考古学ジャーナル』295, 22-24。

1989 「極北カナダ・エスキモー文化調査」『考古学ジャーナル』300, 20-24。

スチュアート ヘンリ・松本拓

2000 「考古学資料における交流の読み方—民族学からのメッセージ」小川英文(編)『交流の考古学』pp.21-49, 東京:朝倉書店。

Taylor, J. G.

1974 *Labrador Eskimo Settlements of the Early Contact Period Canada*. National Museum of Man. Publications in Ethnology 9. Ottawa: National Museum of Canada.

1984 Historical Ethnography of the Labrador Coast. *Handbook of North American Indians* 5. Arctic, pp.508-521. Washington: Smithsonian Institution.

手塚薫

1991 「カナダ極北圏におけるエスキモー集団の居住形態的な特性について—エスキモー文化に普遍的な海洋適応の理解に」『古代探叢』3, pp.617-633, 東京:早稲田大学出版会。

1999 「極北圏における大型住居の出現と文化接触の関係」『北海道開拓記念館紀要』27, 77-84。

Turner, W.

1780 *Report of a Visit to the Eskimos Who Were Hunting Caribou Inland from Nain, 8 August-25 September 1780*. London: Moravian Mission Paper.

Usher, Peter J.

1976 Fur Trade Posts of the Northwest Territories: 1870-1970. In Milton M. R. Freeman (ed.) *Inuit Land Use and Occupancy Project* 2, pp.153-168. Ottawa: Minister of Indian and Northern Affairs.

Val, Erik

- 1976 Inuit Land Use in the Port Burwell Area. In Milton M. R. Freeman (ed.) *Inuit Land Use and Occupancy Project 1*, pp.121-123. Ottawa: Minister of Indian and Northern Affairs.
- Woollett, James M.
- 1991 *Archaeofauna of Nuanigok: Results of 1987 and 1988 Excavations*. Final draft. pp.1-42.
- 1999 Living in the Narrows: Subsistence Economy and Culture Change in Labrador Inuit Society during the Contact Period. *World Archaeology* 30(3), 370-387.
- Woollett, James M., Anne S. Henshaw and Cameron P. Wake.
- 2000 Palaeoecological Implications of Archaeological Seal Bone Assemblages: Case Studies from Labrador and Baffin Island. *Arctic* 53(4), 395-413.

